

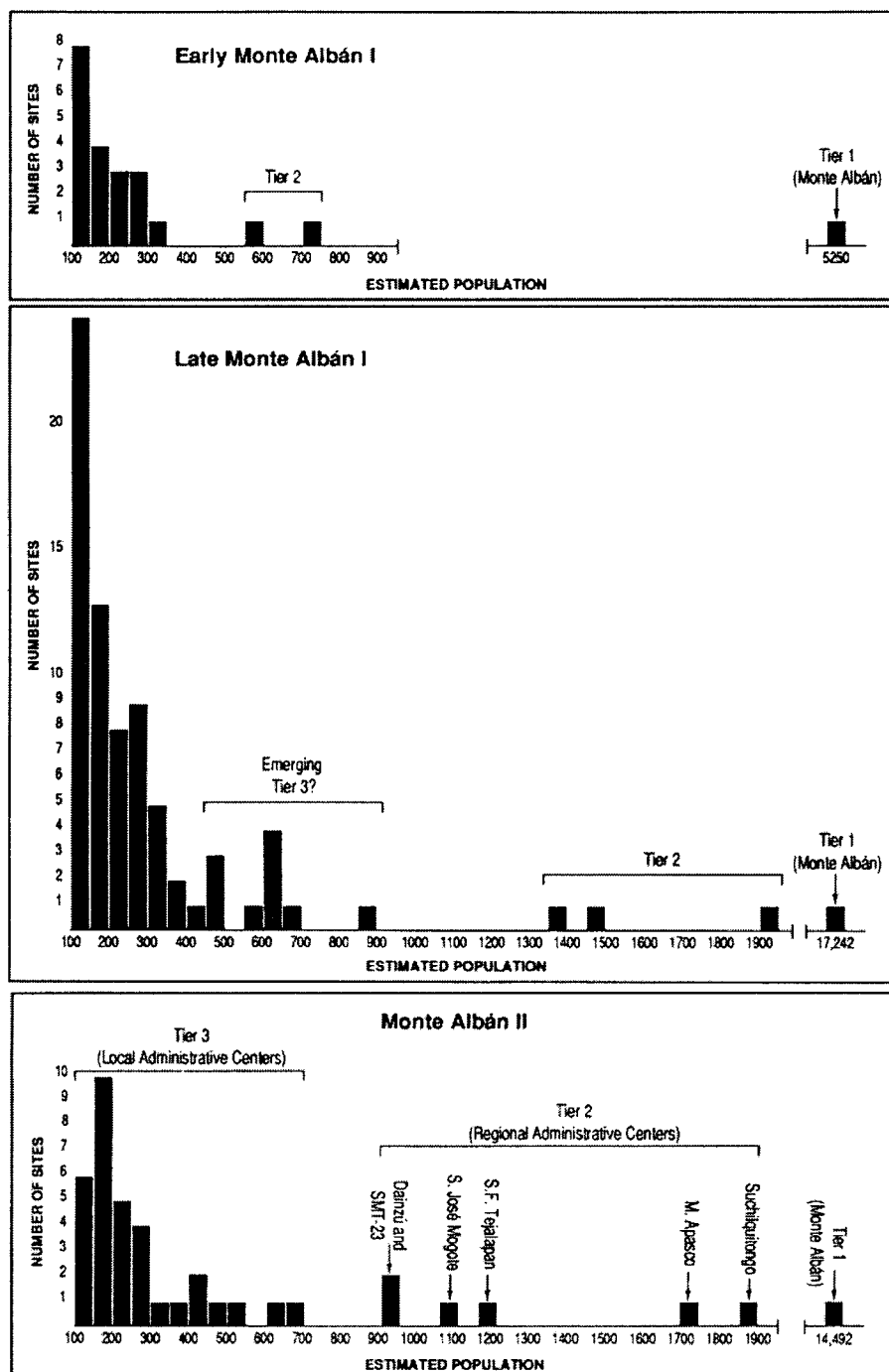
研究の背景と目的

佐々木憲一・石川日出志

文部科学省学術フロンティア推進事業「日本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究」の一翼を担うサブプロジェクト①「国家形成と文化・宗教」では、日本列島における国家形成のあり方に迫るため、弥生・古墳時代の墳墓集成を企画した。国家形成過程に考古学的に迫るには、様々な先行研究があつて、この種の実証的研究が進んでいるメソアメリカやメソポタミアでは、集落の変遷からこの目的を達成しようとする研究がすでになされている。これらの地域では、集落遺跡の規模を把握し、同一時期に集落がいくつかの階層に分化しているのかを探り、そしてどの段階でそういった階層分化が起こるのかを追求している。メソアメリカ、オアハカ峡谷のサポテカ Zapotec 文明 (500B.C. ~ 750A.D.) を例にとると、モンテ＝アルバン Monte Alban I 期の前期 (500 ~ 350B.C.) では、既に「首都」(第1階層 Tier 1)に加えて、「県庁所在地」のような地域の拠点集落(第2階層 Tier 2)が2カ所出現している。モンテ＝アルバン I 期の後半 (350 ~ 100B.C.) では、地域の拠点集落 (Tier 2) と、そしてさらにその下のレヴェルの小地域の拠点集落 (第3階層 Tier 3) が出現しつつあり、この3階層がモンテ＝アルバン II 期 (100B.C. ~ 200A.D.) に確立する。在地の村々を含めると、集落が4階層に分化したことを示し、これをケント＝フラナリーら (Marcus and Flannery 1996) は、社会が国家へ進化した段階とする。なお彼らの研究では、遺跡の面積をその集落の人口に置き換えた度数分布グラフを提示しているが、これはメソアメリカのテオティワカンがそうであるように、個々の集合住居がよく発掘され、住居数から人口を推測しやすいという、メソアメリカ考古学の例外的に恵まれた条件によるもので、比較的信頼度は高い。

メソポタミアでは、ロバート＝アダムス (Adams 1981) が、ウルク Uruk, ニップール Nippur 両遺跡とそれらの周辺地域をフィールドに、前・中期ウルク期 (3700 ~ 3300 B.C.) から後期ウルク期 (3300 ~ 3100 B.C.) にかけての集落構造の変化を実証的に跡付けた。前・中期ウルク期では「首都」のように、突出した中心集落が1箇所だけであったのが、後期になると「首都」に加えて、「県庁所在地」のような地域の拠点集落、そしてさらにその下のレヴェルの小地域の拠点集落が出現する。村のような一般集落も入れて、集落の4階層が出現したことになる。このパターンは前述のサポテカ文明と同様である。アダムスはさらに都市地理学の手法を導入し、対象地域内における集落の規模による順位と集落面積との関係に基づき、集落が相互にどの程度緊密に依存しあっていた、その地域内の集落がどの程度統合されていたかもグラフ化した (日本語での紹介は後藤 [1996], 佐々木 [2000])。この手法によると、集落同士の統合性が増すとともに、グラフも凸形カーブから直線へ、そして凹形カーブへと変化するという。このグラフに基づき、前・中期から後期になって、集落同士がより統合されたことがわかる。

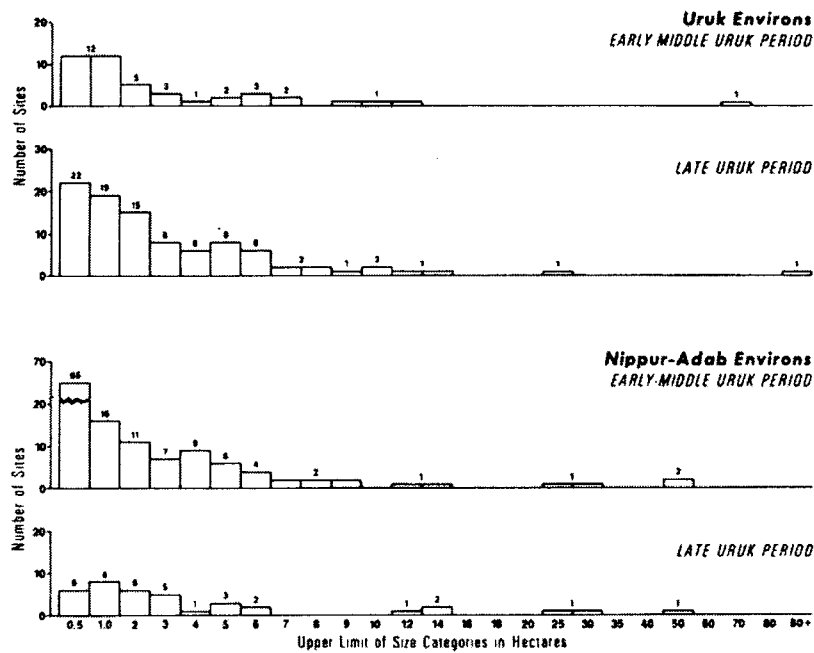
我々も、集落研究や王宮の研究が国家形成に迫るのに大きな貢献をしてきた現実を認識している。ただこの種の研究は、土砂の堆積が進まず、集落遺跡が地表に残っており、大きさや時期が発掘以前に判明している乾燥地域だからこそ可能なのである。日本や中国のように集落遺跡が地下に埋没しており、戦略的に発掘しない限り、集落の様相が把握できない場合では、このような研究法は採用困難である。したがって、フラナリー (1998) は、集落や王宮から得られるデータのほかに、墳墓も規模などに基づき4階層に分化することも、国家形成期研究において重視する。日本をフィールドにする



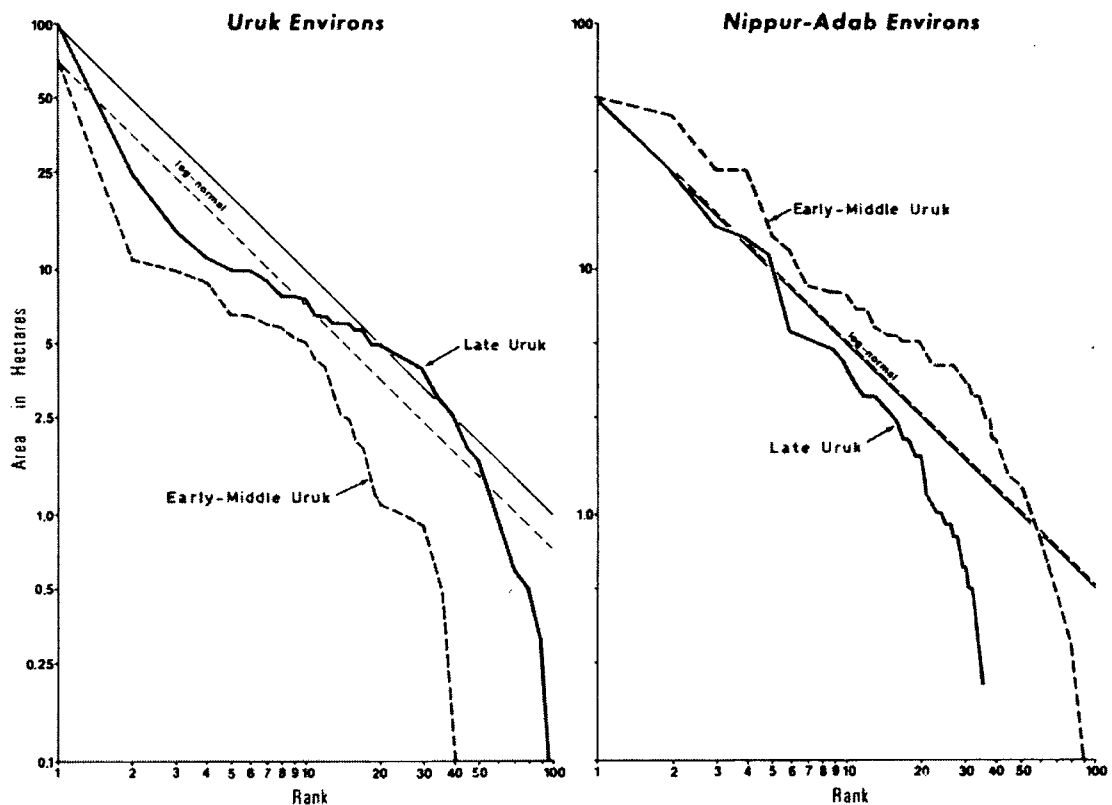
第1図 サポテカ文明における集落構造の変化 (Marcus and Flannery 1996)

福永伸哉 (2004) もこのフラナリーの提言を取り入れ、古墳時代に古墳が規模・形態に基づき、4階層以上に分化することから、古墳時代社会が国家段階に相当近かったことを主張する。

日本の弥生・古墳時代考古学は、小林行雄 (1961)、近藤義郎 (1983)、都出比呂志 (2005) らの記念碑的業績を挙げるまでもなく、墳墓研究が国家形成研究の大きな基盤となってきた。それは田中琢『倭人争乱』のような一般向けの書籍でも明らかである。特にこの本では、対象とする地域・時期で集落の様相がある程度判明していても、墓のデータを中心に議論をするほど、こだわったアプローチを採用している。こういった現状はやはり避けがたいと思う。というのは、発掘以前に古墳はその規模、墳形が把握でき、また盗掘により副葬品の一部も知られていることがあるため、明治以来早くから研



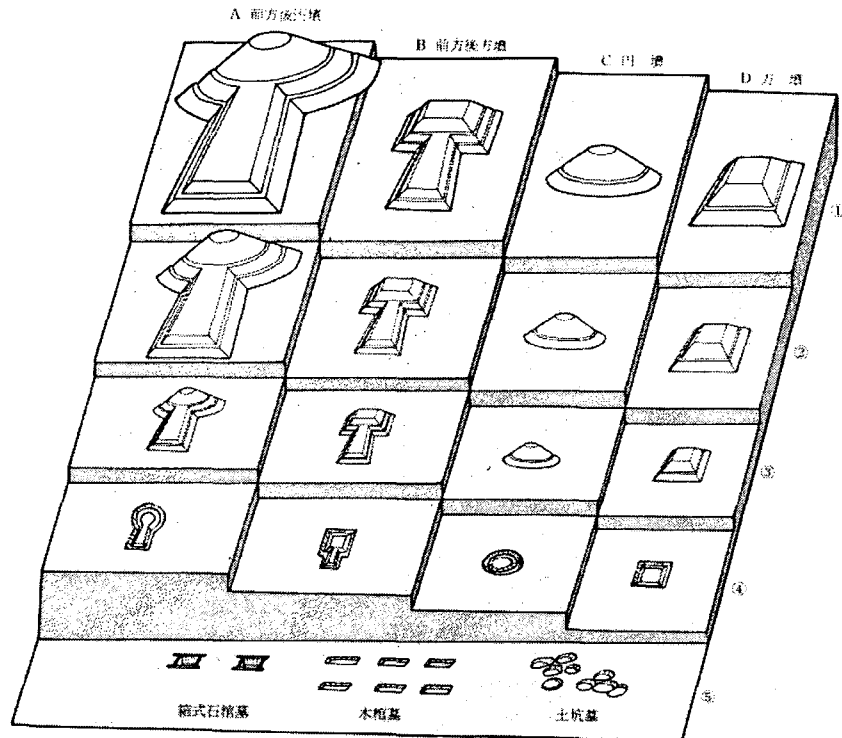
第2図 ウルク期における集落構造の変化 (Adams 1981)



第3図 ウルク期における集落群の統合化過程のモデル (Adams 1981)

究が進んできた現実がある。そこで本サブプロジェクトでも、墳墓の集成を行うことにより、国家形成研究に貢献することを企画した。

実は、文字のない時代の社会を理解するのに墓の研究が有効かどうかについては、すでに議論の蓄積がある。社会構造が墓制に反映されるというやや楽観的な立場をとっていたのは、日本人研究者以



第4図 都出比呂志による古墳の階層性モデル (1989)

外に、ルイス＝ビンフォード (Binford 1970)、アーサー＝サックス (Saxe 1970) やジョゼフ＝テインター (Tainter 1978) といった1960年代、70年代のアメリカ合衆国におけるプロセス考古学派の研究者たちである。彼らの立場の背景には、地域、文化、時代を超えて社会は同じプロセスに基づき進化した、という考えがある。つまり、現在も過去も社会は同じように機能しているはずだから、現代人の思考に基づき過去を議論できる、という日本ではありえないような楽観的な立場である。ただ日本でも例えば、一族の墓地が集まっている場合において、本家の墓石はよりおおきく、また墓地の中心に存在したりするので、あながちこの立場も否定できない。

このプロセス考古学派の「地域、文化、時代を超えて社会は同じプロセスに基づき進化した」という考え方に猛反発し、その一環として、墓地遺跡の研究結果が当時の社会理解に必ずしも有効ではない場合があることを主張したのが、イギリスのイアン＝ホダー (Hodder 1982) やマイケル＝パーカー・ピアソン (Parker-Pearson 1982) ら、象徴考古学を唱える学派である。彼らの立場は、物質文化の意味は社会や時代によって違うはずであるから、同じパターンの共同墓地を検討しても、その意味・解釈は地域や時代によって同じであるはずがない、ということである。彼らの議論をプロセス考古学者に納得させるため、イギリス現代社会では低い社会的地位におかれるジプシーが、お墓にもっともお金をかける (Parker-Pearson 1982)、あるいは西アフリカ、ガーナのLodagaa地域では、村人はすべて首長の姿で埋葬される (Goody 1962) といった民族例を紹介している。

佐々木 (1990) も象徴考古学者の立場を軽視する立場ではない。しかし、もし考古学的に検出した墳墓の複数の属性間における相関関係を現在認識できれば、それは過去も有意であったはずと考える。例えば近畿地方や吉備では、古墳の規模と副葬品の多寡には明瞭な相関関係があり、したがって副葬品の様相が盗掘などで不明な場合でも、古墳の規模の違いはやはり古墳築造当時でも意味があったと考えるのである。さらに墳墓と同時期の集落の解釈も同時に考慮に入れば、導き出される仮説の蓋然性はさらに高まるであろう。古い研究であるが、北アメリカのミシシッピ文化 (11～16世紀) の

社会構造をモデル化するため、クリストファー＝ピーブルズら (Peebles and Kus 1977) は、集落が「首都」「地方拠点集落」「一般集落」と3階層に分化した社会が民族学的に首長制段階であることにに基づき、埋葬のあり方も「墳丘墓に葬られるもの」「墳丘を伴わない土壌墓に葬られるもの」「(墓が作られず)遺骸が墳丘の盛土に混ぜられてしまうもの」の3階層がある、と主張した。この解釈は集落の3階層の存在から、埋葬方法の3階層の可能性を無理に導き出したきらいがある。それでも、集落からのデータと考え合わせることで、墳墓のデータも一概に無視できない。吉村武彦(2004)は古墳ではなく、王宮こそが国家形成研究の基盤と主張するが、日本では集落・王宮のデータが不十分である以外に、複数の属性を同時に検討することにより、墳墓の研究も文字のない時代の社会構造に迫る有効なアプローチとなり得るのである。

ここで社会構造のどの部分に考古学は迫れるのか、言及しておきたい。社会構造は「タテの側面 vertical dimension」と「ヨコの側面 horizontal dimension」とに分けて考えることが可能である (Blau 1970, Tainter 1978, McGuire 1983)。タテの側面とは“inequality”, つまり階層性を示し、ヨコの側面とは“heterogeneity”, 同一階層における職業区分、出自の差異などを意味する。この区別は有効で、例えばジョン＝オシェイ (O'Shea 1984) は、アメリカ合衆国ネブラスカ州のオマハ Omaha 族、ポーニー Paunee 族先住民の社会構造と彼らの集団墓地遺跡を比較し、その結果、上記のタテの側面は葬制の差異に反映されるが、ヨコの側面は反映されないとする。ただ、オシェイの研究が目指すのは、墓制の考古学的分析が一般論としてどの程度有効かをみることであって、すべての地域のケースをこれで断定することはできない。

様々な困難は覚悟しているが、このサブプロジェクト①では、国家形成期である弥生・古墳時代社会のタテとヨコの両方の側面に迫りたいのである。まずこれまで大きな実績がある、墓制からタテの側面に迫るにあたっての具体的な目標を述べる。ひとつは弥生時代に階層分化がどの程度進んでいたのか、進んでいなかったのかを明らかにしたい。古墳時代については、これまでの研究が古墳に偏ってきた現実を踏まえ、マイナーな墳墓との比較から、前方後円墳が「首長墓」であることに迫りたい。これらの問題については既に先行研究も数多く、本研究の悉皆的なアプローチが、先行研究を補強することになる。

次に、特に困難なヨコの側面について考えるところを述べる。ヨコの側面も概ね、1) 同一時期の地域差を明らかにすることと、2) 同一時期同一地域内での出自、職業区分など何らかの「差異」を抽出することのふたつの研究レベルに分けることが可能である。第1の側面に関しては、次のような目的をあげることができる。まず、弥生時代では、墓制に関するルールは地域を越えて共有されたかどうか (おそらくされていない)。古墳時代については、都出比呂志 (1989, 1991) が「前方後円墳体制」とも形容するような畿内の墳墓階層システムは、関東でも反映されていたか、そして関東内でもそういった「システム」に地域的差異があったか。

旧国単位での地域性に関しては先行研究も多く、本研究でもそれを検証することは重要である。本研究ではさらに、上記第2の側面に沿って旧国内での「単位地域」の設定を目指したい。特に関東の古墳時代後期では、もちろん前方後円墳の築造が継続され、それが関東の特性となっているが、前方後円墳が後期に築造されなかった地域もあり、そのような地域の歴史を評価するためには、中小古墳の分析が前提となる。そして中小古墳の研究は前方後円墳の研究に比べ、十分とはいえない面がある。そういった作業を基盤にし、後に「郡」「里」と呼ばれる地域編成に迫れば、貢献は大きいと思う。これに関連し、下総地域を例にとり、数少ない文献史料を駆使して、川尻秋夫 (2003) が龍角寺古墳群岩屋古墳および龍角寺の造立主体が大生部直であり、印波国造である可能性を論じている。この「日

研究の目的と背景

本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究」では墨書土器集成の継続と文字瓦の全国集成を実施しており、そういった史料からの情報も取り入れて、旧国内での地域区分に迫りたいと思う。

文献（アルファベット順）

- Adams, Robert Mc. C. 1981 *Heartland of Cities*. University of Chicago Press, Chicago.
- Binford, Lewis R. 1970. Mortuary Practices: Their Study and their Potential. In *Approaches to Social Dimensions of Mortuary Practices*, edited by J. A. Brown, pp.6-29. Society for American Archaeology, Memoir, No.25.
- Blau, P. M. 1970. A Formal Theory of Differentiation in Organizations. *American Sociological Review* 35, pp. 201-218.
- Flannery, Kent V. 1998. The Ground Plan of Archaic States, *Archaic States*, edited by Gary M. Feinman and Joyce Marcus, pp.15-57. School of American Research Press, Santa Fe.
- 福永伸哉 2004「前方後円墳の出現と国家形成」『文化の多様性と比較考古学』pp.121-130. 考古学研究会 50 周年紀年論文集
- Goody, Jack 1962 *Death, Property, and the Ancestors*. Stanford University Press, Stanford.
- 後藤明 1996「人口モデル—島嶼的脈絡において」植木武（編）『国家の形成』pp.41-100. 三一書房
- Hodder, Ian 1982 *Symbols in Action*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 川尻秋夫 2003「大生部直と印波国造」『東国古代史の基礎研究』塙書房
- 小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- Marcus, Joyce and Kent V. Flannery 1996 *Zapotec Civilization: How Urban Society Evolved in Mexico's Oaxaca Valley*. Thames and Hudson, London and New York.
- McGuire, Randal. H. 1983. Breaking Down Cultural Complexity: Inequality and Heterogeneity. *Advances in Archaeological Method and Theory*, Vol.6, edited by M. B. Schiffer, pp.91-142. Academic Press, New York.
- O' Shea, John. 1984. *Mortuary Variability*. Academic Press, New York.
- Parker-Pearson, Michael 1982 Mortuary Practices, Society, and Ideology: an Ethnoarchaeological Study. *Symbolic and Structural Archaeology*, edited by Ian Hodder, pp.107-112. Cambridge University Press, Cambridge.
- Peebles, Christopher S. and Susan Kus 1977 Some Archaeological Correlates of Ranked Societies. *American Antiquity*, Vol. 42, pp. 421-448.
- 佐々木憲一 1990「アメリカ考古学と日本考古学—その協調の可能性」『考古学研究』第 37 巻第 3 号, pp.25-44.
- 佐々木憲一 2000「アナロジー」安齋正人（編）『用語解説現代考古学の方法と理論』pp.3-12. 同成社
- Saxe, Arthur 1970 *Social Dimensions of Mortuary Practices*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, the University of Michigan. (University Microfilms International, Ann Arbor)
- Tainter, Joseph. A. 1978. Mortuary Practices and the Study of Prehistoric Social Systems. In *Advances in Archaeological Method and Theory*, Vol.1, edited by M. B. Schiffer, pp.105-141. Academic Press, New York.
- 田中琢 1991『倭人争乱』（「日本の歴史」2）集英社
- 都出比呂志 1989「古墳が作られた時代」都出比呂志（編）『古墳時代の王と民衆』（「古代史復元」6）pp.25-52. 講談社
- 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』343 号, pp.5-39.
- 都出比呂志 2005『前方後円墳と社会』塙書房
- 吉村武彦 2004「ヤマト王権とアヅマ・ヒナ」日本考古学協会 2004 年度総会講演（於千葉大学）